在韓日本出身者の韓流前の韓国生活

―ノンフィクション作品を中心に―*

立命館大学　今　里　　基**

1.　はじめに

本稿は1970年代から韓流ブーム前の2003年以前に在韓日本出身者[1]が自らの生活を扱ったノンフィクション作品を対象に、彼/彼女らの生活や韓国人との関わりの特徴を整理する。それを通じて、韓流ブーム前の彼/彼女らの韓国での韓国人との接触・交流を通じた、韓国人と日本出身者へのまなざしの変化について考察する。そのうえで、この時代に韓国で暮らしていた日本出身者らの韓国生活を通した韓国観と戦前から連なる韓国に対するステレオタイプの連続性を提示する。

韓国には2021年12月末現在約２万4000名の在韓日本人が暮らしている。それに加え、韓国国籍であるため統計上具体的な数字の把握は困難であるが、在韓在日コリアンと言われる日本生まれ日本育ちの在日コリアンが韓国で暮らしている。また、2003年にNHKで放映された韓国ドラマ『冬のソナタ』をきっかけに、韓流ブームが数次のブームを経て、現在に至るまで続いている。その影響で韓国への留学生や日韓カップルの結婚が増加し、日本国籍を持つ者のみではあるが、2003年に約１万6000人だった人口は2021年には冒頭で示した通り1.5倍増加した。しかし、韓流以前にもなんらかの理由で韓国へ移動した者は存在し、また当時の韓国は日本と経済的格差がまだ開いている時代であった。さらに、80年代は軍事独裁政権が支配していた時代であり、日本人の中には暗いイメージがあったとも考えられる。

日本人の韓国、さらには朝鮮半島に対するイメージはどのように積み重なっていったのだろうか。例えば、姜尚中は戦後の「日本文化論」が成立された過程を戦前の植民政策学から紐解き、まず当時の研究者や官僚らが明治に西洋から日本に入った植民政策学の影響を受けたことを論じている[2]。そして、その延長線上に例えば福沢諭吉の複数の書物で「支那」や朝鮮を明示的ではないものの、「卑屈」「残忍」などの単語でいわゆる「未開」であるように位置付けていたことを指摘している（姜1996：94−96）。これらの戦前からの思想の影響は、現在に至るまで在日コリアンや朝鮮半島、そして分断された南北両国（加えて中国人にもあてはまるだろう）に対するイメージや意識、あるいは無

---

* 本稿は第19回日韓次世代学術フォーラムの日本語予稿集を修正の上、大幅加筆したものである。

** 大学院一貫制博士課程

[1] 本稿は韓国にルーツを持たない日本人を在韓日本人、韓国に居住する在日コリアンを在韓在日コリアンと表記する。その他特に区別する必要がない限りは在韓日本人出身者と表記する。また、韓国国籍の在日コリアンであることを強調する場合に在日韓国人を使用している箇所があることを記しておく。

[2] 本稿ではサイードの『オリエンタリズム』（1993）を援用し、戦後日本の「オリエンタリズム」について検討した姜尚中（1996）の議論を用いる。

意識のうちに「マイクロアグレッション」[3]を引き起こす要因として日本の一般市民にまで染みついているのは言うまでもない。例えば、日本国籍の在日コリアンである金村（2019）はコラムで外国にルーツを持たない日本人を意味する「純ジャパ」という言葉をマジョリティである韓国好きの女子が無意識に使い、果ては「ハーフになりたい」とまで口にしたことに対する違和感を呈している。彼女は純ジャパの定義について金村が取材する中で悪気もなく説明をする。その中で金村は「『親が韓国人と言ったり、韓国語でしゃべったりしたらいじめられるからだよ』と言いたかったが、わたしが韓国人だとカミングアウトしてうらやましがってた彼女にどう伝えればいいのか分からなかった。」と心境を記している[4]。このような外国ルーツの者に対するマイクロアグレッションは戦前から連綿と形成されたマジョリティの意識の帰結だと言えよう。本稿ではこうした意識に対し、姜の議論を用いて、日本出身者の韓国生活を通した韓国人の見方の変化を検討する。

さて、1965年の日韓国交正常化後に来韓した在韓日本出身者の先行研究は、在日コリアンの母国留学によるアイデンティティの変化（유끼 2001、윤다인 2014他）、文化的な葛藤や日韓ダブルの子どもの言語戦略に関する研究を中心に蓄積がなされてきた（임영언・이화정 2013、松樹 2020、川端 2020他）。一方で、韓国における在韓日本出身者の生活そのものに関する研究はそれらと比較すると少ない（cf. 아사다 2009）。特に2003年以降のいわゆる韓流ブーム前に来韓した日本人が韓国の地でどのような生活をし、また韓国に対していかなる感情を抱いていたのかについては十分な整理や分析がなされていない。他方で1965年以降、多くの在韓日本人が自らの韓国における生活を綴った書籍を日本語で出版している。多様な出版物が出されているが、本稿では、特派員や学者などの専門的な知識に則して書かれた書籍ではなく、留学生や駐在員の妻などによる等身大の体験を綴った自伝やノンフィクション８冊を検討する[5]。この検討から、現在よりも韓国人に対する偏見的なまなざしが強かった日本人の現地の韓国人との接触によるまなざしの変化が生じたことを指摘する。

2.　文献の概要

本稿で検討する文献は表に記した８つである。著者の当時の立場を大別すると、留学生（日高、戸田、筒井、李）、駐在員妻（小野田、渡邉、姜信子[6]）、現地採用（長澤[7]）である。また、著者8人のうち、李と姜信子は在日コリアンである。具体的な出版年及び滞在期間は表のとおりである。

---

[3] マイクロアグレッションとは相手を差別や中傷する意図がないのに、無意識のうちに差別や中傷をしてしまっている行為のこと（スー 2020）。本稿で扱う時代にはこの単語そのものは用いられていないものの、後述する事例でもそのような場面があるため、使用することとする。

[4] 金村詩恩（2019）「韓国好きの若者が放った「純ジャパ」という言葉に抱いた違和感」https://gendai.media/articles/-/68887?imp＝0（最終閲覧日 2023.1.25）現代ビジネス

[5] 駐在員や研究者が著した文献は黒田（1985他）や四方田（1987他）など多数あるが、時局の政治を追った内容や学術的な分析を含んだ部分が一定の割合を占めているものもあるため、これらを含めた分析は今後の課題としたい。

[6] 姜信子は在日コリアンであり、見方によっては永住帰国ではないにせよ、（これは李もそうであるが）「帰国」したと捉えることもできる。だが、あくまでも公務員の夫の韓国の自治体への長期派遣に帯同した形であるため、厳密には駐在員妻というカテゴリーに属するか検討の必要がある。しかし、実質的には海外で働く夫に帯同している点を考慮し、本稿では駐在員妻のカテゴリーに含めることとした。

[7] ただし、長澤は現地企業に顧問として採用されており、立場や収入については日本人駐在員に近いと推定される。

表　本報告で扱う在韓日本人の書籍の詳細及び著者の滞在期間

著者名	出版年	タイトル及び出版社名	著者の韓国滞在期間
小野田美沙子	1988	『ワンダーランドソウル』ちくま文庫	77年１月～79年９月
日高由仁	1989	『新村スケッチブック』新宿書房	81年４月～87年10月
長澤洋	1988	『びっくりのんびり韓国暮らし』草思社	83年～不明
戸田郁子	1988	『ふだん着のソウル案内』昌文社	83年12月～現在
筒井真樹子	1991	『ソウルのチョッパリ』亜紀書房	87年３月～88年６月
姜信子	1993	『私の越境レッスン韓国編』朝日新聞社	89年５月～91年３月
渡邉真弓	1999	『韓国のおばちゃんはえらい！』昌文社	94年11月～96年10月
李淳美	1998	『私が韓国へ行った理由―在日コリアン2.5世の韓国留学記―』国際通信社	96年３月～97年９月

※順番は著者の韓国滞在期間順に並べている。

滞在期間は概ね１年強から３年（日高は６年半）である。また、70年代後半から90年代後半と幅があり、1987年の民主化があるなど、この間に在韓日本出身者の生活環境も大きく変化したことに留意する必要がある[8]。著者に関して言及すると、戸田はのちに韓国人男性と結婚し、その後も韓国に在住している[9]。その他の特徴として筒井、渡邉、長澤は移住前に直接的な韓国とのかかわりを持っていない。また、残りの者は学生時代や社会人生活で韓国語や韓国との仕事に能動的に関わった経験があったり、先述の通り自らが在日コリアン（姜信子、李）である。以下、次章ではそれぞれ立場は異なるものの、韓国で長期間暮らし、韓国人と関わっていく中で自身の韓国に対する考え方を変化させていった様子を例示する。

3.　韓国人へのまなざしの変化

3-1.　関係の捉え直し

1910年から1945年までの35年間、日本は朝鮮半島を植民地支配した。1948年に韓国は独立を果たすが、クォン（2010）によれば、独立するにあたり、新たにナショナリティを確立する必要があった。そのために当時の政権は「日本色」の排除を意識し、「反日」とまでは言わないものの、「脱日本化」＝「韓国化」を意識した政策を行った。そのため、当時（特に日韓国交正常化直後の60年代後半）の在韓日本人は日本的なものを排除することが意識された中で暮らすことを強いられることとなった。もちろんそれは日本の戦前の支配の結果に起因するものである。だが、直接的に支配に加担していないにも関わらず「反日」的な感情を意識しながら暮らすこととなった。しかし生活する中で、必ずしもそうとはいえない場面に遭遇し、捉え直しを意識するきっかけを持つことがある。例えば、

[8] 例えば、80年代前半までは夜間の通行禁止令があったが、82年に大部分の地域で解除し、88年に全面解除がなされた。また、民主化前の本には共通して描写されているが、大学にてデモが頻繁に開催され、その度に警察側から催涙弾が投げられ、それに苦しみながらデモの横を登校するというのが日常の風景となっていた。

[9] 戸田（2012）

小野田はある日相乗り[10]でタクシーに乗車した際、日本人だと気づいた運転手から、「日本人とわかっていたら私の車には絶対乗せなかった」と言われる経験をした。そして車内で植民地時代の経験をまるで朝鮮総督に批判するように延々と続け、小野田は涙をする。しかし同乗していた年配女性が「彼女には責任がない」と運転手を諭したことで、最後には運転手と女性から「韓国で楽しくお過ごしください」と言われた経験をしている[11]。いくつかの書籍にはこうした韓国人との草の根のかかわりを通じて、国レベルでの関係とは異なる、韓国人と日本人との関係を考え直す記述が散見される。また韓国人の友人の「友達としては本当に好きだけど、でもあなたは日本人だから心の底では憎んでいる[12]」という言葉にショックを受けて韓国を知ろうと思い留学した戸田は、同じ学科の韓国人と公害問題について議論した際、「韓国はまだ遅れているから、そこまで手が回らない」という言葉に違和感を覚えた[13]。それと同時に、自分がかつての侵略者の立場にいたことを振り返り、複雑な心境になる。複数の書籍には、経済的な優位性を軸に韓国を見ていたことへの自省や、日韓の経済的優位性をめぐり複雑な反応をする韓国人への思いが綴られている。

一方で、日本に生まれ育った在日コリアンにおいても、韓国に住むことによって自らと本国の韓国人との関係性を捉え直す機会が生ずることがある。李は留学生活をはじめて間もないまだ韓国語の意思疎通が不十分だった時期にCDラジカセを買いに百貨店に行くことがあった。わずかばかりの知っている単語を使いながら辛うじて商品の在庫を確認し、在庫がないため、後日受け取りになり、注文書を記入することになった。氏名欄に李淳美（イ・スンミ 이승미）とハングルで記入し店員に渡すと、店員はため息をはいて受け取った。店員は名前を見るまでは留学したての日本人が来たと思っていたのが、在日コリアンだと認識した時の正直な最初の反応が「ため息」だったのだ。本国の韓国人の在日コリアンに対するまなざしを真正面から受けた形となったが、そこで彼女が思い出したのが韓国におけるサービス業に対する根強い職業差別意識だった。これがもし日本であれば「なっていない」と客観的に非難するところである。だが、自分を「在日韓国人」だとまなざす意識に耐えることのほうが難しかった。職業差別意識の結果として、韓国のサービス業の人々の意識改革が徹底されてない[14]ことを理解しようと捉え直そうとしたものの、試みる余裕がここではなかったのであった[15]。一方で「韓国を嫌いになりたくない」[16]という気持ちも生じており、その一心で日本と韓国を相対化しようと努めているようにもうつる。在日韓国人は国籍は韓国であるが、日本に生まれ育った結果、日本の文化や習慣を内在化していることは事実であり、その自らが育った基準に自らが巻き込まれ、葛

---

[10] 韓国では1982年に法律でタクシーの相乗りが禁止になり、2022年に再び合法となったが、小野田が韓国に居住していた70年代後半はタクシーの相乗りは法律上問題なかった。

[11] 小野田（1988）pp.176–177

[12] 戸田（1988）p.44

[13] 戸田（1988）pp.61–62

[14] この点は長澤（1988）のp.21–22でも触れられている。ハンバーガーショップでアメリカ人の客が韓国人店員との注文に際するトラブルで返金を受けたものの、店員が金を放り投げるようにカウンターにばらまいたため、さらなるトラブルとなった。それを見ていた年寄りから「韓国でサービス業はまだこれからです」と言われるという描写がある。

[15] 李（1998）pp.30–32

[16] 李（1998）p.32

藤し関係性を捉え直そうとする姿が見られた。

3-2.　日本人に対する批判的なまなざし

韓国生活を通して自身の韓国に対する奢りや無知を自覚し、日本人に対して批判的なまなざしを持った者もいる。例えば、筒井はある時、かつての日本の朝鮮半島支配の拠点であった朝鮮総督府の建物の前[17]で記念撮影をする日本人修学旅行生らを見かけた。だが、その修学旅行生らをよく見ると、彼らは日の丸のバッジをつけていた。衝撃を受けた筒井は、日本人観光客の無知さを嘆き、日本の新聞に投書をするという行動に出た[18]。また、長澤は出張に来た日本人男性の行動に対する疑義を呈する。具体的には、風俗の女性を一晩どころか朝の食事、さらには通訳だといって仕事先まで連れまわしているということであり、韓国人がプライドを傷つけられていないか危惧する心境を記している[19]。その他、日高は日本語ができる韓国人女性に間違えられたことで、その立場を追体験した。日高は日本のテレビ局の通訳兼レポーターの仕事をし、大衆的な食堂で料理を注文した。しかし、スタッフの分は出るが、いつまでも自分の分だけが出てこない。後にその原因はお金で男性と付き合う商売の韓国女性と勘違いされ、提供する必要がないと判断されていたからだとわかる。この当時韓国語ができる日本人女性という発想が韓国人になく(多少発音がおかしくても田舎の人と思われていた)、そのような女性は上述の職業に限られるというのが世間の認識だった。そのような原因は長澤の例にあるような日本人男性の存在と考えられるが、図らずも日本人女性である日高は韓国人女性でないことを反論できず、複雑な心境に陥るということがあった[20]。以上の事例は、日本人の韓国人に対するコロニアルな感覚や無理解、またその結果としての韓国人の日本語商売をする女性に対する冷たいまなざしがこの時代には存在していたことを示している。

3-3.　自らの無自覚に対する反省

先述した戸田の留学の動機は自らの韓国に対する無自覚がきっかけであったが、住むようになってから気づかされるケースも見られる。渡邉は記者だった夫と子どもと共に、リトル東京ではない庶民的な街に住みたいという理由でソウルの西橋洞（ソキョドン）のアパートに住むことにした。そこの大家は90年代前半に60代であり日本語が堪能な女性であった。一家が引っ越した後、ある年に韓国の独立運動記念日（3 月 1 日）を迎えた際、ひな祭り（3 月 3 日）が近かったこともあり、大家の女性に「ご存じかも知れませんが」とひな人形を見せる機会があった。すると彼女は記憶違いで国民学校で毎日拝んでいたと語った。それに対し渡邉は簡単に謝ることも無神経な行為だと考え、言葉がうまく出ず、「これを見てね、小さな子供のときのそのまんまの気持ちになったね」という言葉に圧倒されるだけであった[21]。

---

[17] この時点では国立中央博物館となっており、その後1995年から96年にかけて解体された。
[18] 朝日新聞1987年11月11日付朝刊 5 面「胸に日の丸で訪韓は無神経」
[19] 長澤（1988）pp.66–67
[20] 日高（1989）pp.201–202
[21] 渡邉（1999）pp.78–81

一方で日本に生まれ育った在日コリアンでも韓国に無自覚な偏見を持っていたとハッと気づかされることがある。姜信子が家族で住んでいた住居は風呂なしの住宅公社のアパートであった。そのため家ではお湯を鍋で大量に沸かすことで体や髪を洗っていたが、面倒くさいときは水行水でしのいでいた。ところがある日、娘の頭に大量の脂っぽいフケを見つけた。しかし取っているうちにシラミが原因だとわかった。周囲の韓国人からは「子供（以下ママ）には普通いるもんだよ」や「子供にこれだけいたら、ナッチャンオンマ[22]の頭にもきっといるよ」と言われるほどで、実際に家で髪を洗ったところ、タオルにシラミがついていた。そのときの姜信子は「韓国に来たためにシラミなんぞに」と一瞬思ってしまった[23]。しかし、のちに彼女が韓国や日本の新聞を見たところ、同じ時期に日本でも流行しているだけでなく世界的流行であったことを知る[24]。また韓国でも農村部の70％の子どもにシラミがいるという記事も見かけている[25]。姜信子は「シラミのために、韓国の評価を下げるところだった」[26]と反省しているが、その前提に日本にはシラミはなく、韓国にはもしかしたらいるのかもしれない、という偏見や思い込みが隠れていたことは考えられる。

4.　考察―日本出身者の価値観はどう変化したのか

ここまで日本出身者らのノンフィクション作品からまなざしを変化させることとなったエピソードを紹介した。紹介したエピソードから見られる点は日本出身者/（本国の）韓国人の双方に何らかの両国あるいは自国に対する偏見や思い込みがあり、それがぶつかった結果として筆者に何かしらの心情の変化が生じたということである。ここで冒頭の内容に戻ると、姜尚中が提示した福沢諭吉のような「韓国人は『卑屈』『残忍』『未開』」とまでは考えてないにせよ、少なくとも日本人のどこか根底の部分に韓国に対する偏見やステレオタイプ、あるいは無知があったことは否定できない。本稿で扱った作品の登場人物はそれぞれまなざしを変化させてはいるのだが、前提として日本が先という部分がどうしても抜けていない。戸田は先述のとおり韓国人への無知から留学を決め、住むようになってからは韓国の公害の問題を通して韓国が日本と同じ道を歩まないか危惧している。高度経済成長期の日本が公害病を大きな課題としていたのは言うまでもないが、それは結果として日本が先に発展していたことを間接的に認めることにもならないだろうか。また、文化人類学が唱える文化相対主義[27]にも反していることにならないだろうか。一方で日本の歴史教科書検定問題などでは日本政府に批判的であり[28]、その後韓国の大学で教育を受けたことも踏まえて価値観に変化があったのも垣間見られる。

---

[22] オンマは日本語でお母さんの意味。ナッチャンは姜信子の娘のことを指す。

[23] 姜信子（1993）pp.84-88

[24] 例えば、読売新聞「アタマジラミ騒動、知識不足も一因」1988年６月25日東京本社版朝刊15面、毎日新聞「アタマジラミ集団発生　保健所が対策 PR」1989年９月16日東京本社版夕刊11面。

[25] 朝鮮日報「『머릿니』寄生 아직도 많아」1989年10月29日朝刊19面

[26] 姜信子（1993）p.87

[27] 文化相対主義とは文化人類学者のフランツ・ボアズが提唱したもの。それまでの文化人類学では未開人を調査することに際し、ヨーロッパ的価値観が頂点に置かれがちであったが、必ずしもそうではなく、文化は等しく価値のあるものであり、そこに優劣はないという考え方。ここでは戸田が日本的価値観を頂点に置いて物事を考えて無意識に優劣を与えていたのではないかと考えられる。

[28] 戸田（1988）p.148

また、無知という点では以下の点を指摘したい。駐在員の妻として韓国に来た渡邉は先述のとおり、リトル東京ではない庶民的な街である西橋洞で暮らすことにした。その選択は結果として、一般的な韓国人との付き合いを多く持つこととなり、韓国に対して理解を深めることになった。しかし、以下のような出来事があった。幼稚園に娘が入園したころ、給食の調理員で日本の植民地時代に日本語を学び、日本語が流暢な女性が担任に代わって娘たちの様子を説明した。一通り説明が終わった際に「ハルモニ、日本語お上手ですね。まるで日本人みたいです」と言った[29]。渡邉は韓国に来る前、在日コリアンとの関わりがあったため、直接ではないものの、間接的にキムチなど韓国文化を知る機会はあった。ただ、「先入観はなかったといえば聞こえはよいが、結局は関心がなかった」[30] と述べる通り、戦前日本が皇民化政策を取り、同化を強要した結果のハルモニの日本語の流暢さという点に想像が働かず、また「まるで日本人みたいです」と配慮に欠け、誤解を生じさせかねない迂闊な発言もしている。これは渡邉が韓国に住み始めた初期のエピソードであるが、過去の支配の結果という理解とかつて支配した側が安易に言ってはならないことを発言している点で当初は理解が足りなかったとみることができる。

では在日コリアンの場合はどうであろうか。まず、姜信子も李も来る前は韓国語が全くできない状態で韓国生活を始めた。そのため生活の初期では日本人同様言語の問題で不自由であり、葛藤していた部分はある。先行研究などで言われた韓国生活を通して日本人でも韓国人でもない、在日としてのアイデンティティを持つようになる、という点では姜信子と李も共通して言える。しかし、先述した姜信子のシラミの件に関して言えば、繰り返しになるが韓国にどこか偏見があったことを否定することは難しい。生まれ育った日本を基準に価値観を判断してしまう部分が見られた。在日コリアンの場合と日本人の場合とあわせて言うならば、個々人の生まれ育った経験があるため一概にいうことは難しいとしても、生まれ育った日本を中心に価値判断をしてしまうものの、韓国で生活することによって韓国を知り、新たな理解や変化を促す点は存在する。ただし、根本的な部分ではこれらのノンフィクション作品を書いた筆者たちの生まれ育った環境の帰結として、無自覚のうちに日本が現在でも優位だと意識したり、理解に欠けた発言をしたりすることがあるといえる。

5.　終わりに―今後の研究展望を含めて―

本稿は70年代後半から韓流ブーム前までの事例からは、彼/彼女らが韓国生活を通じて、対人距離の在り方や食文化といった違いだけでなく、互いの国（や人）に対するステレオタイプ的なイメージや無自覚さに関して、それまで自分が持っていた「まなざし」を自省し、韓国人あるいは日本人に対するまなざしを変化させ、そこから日韓の歴史的な関係性にも考えを広げていく姿勢が垣間見られるかを検討してきた。

本稿はあくまでも韓流ブーム前までに出版されたノンフィクション作品からの検討に過ぎない。だが、その限られた時代の中で、まなざしを変化はさせているものの、必ずしもそうではない面もあ

[29] 渡辺（1999）p.48
[30] 渡邉（1999）p.30

り、その根底は戦前から連なる日本人の韓国に対するステレオタイプが連続していることを提示した。なお、その後韓国は韓流ブーム前の1997年のアジア通貨危機によってIMF（国際通貨基金）による支援を受けることになる。後に支援から脱却したものの、この間の経済政策によって格差が拡大し本稿が扱った時代の韓国の姿からは経済も社会も大きく変化することとなった。またIMFの支援を受けた時代の大統領であった金大中以降、韓国の大統領は李明博を除いて全て植民地支配からの解放後に生まれた世代となり、それまでの大統領とは異なり、日本語を学んでいない世代となった。そのため政治的に日本とのつながりを必ずしも重視しなくなったとされる。それは韓国国民もそうであり、かつては日韓関係の問題で大統領の支持率が左右される時代があったが、今では日韓問題で支持率が変化することは近年ほとんどなくなっているとされる（木村 2022：166–169）。韓国が世界化する中で韓国人の中で日本への存在や関心が相対的に低下していると考えることもできる。ある時期まで韓国にとって日本は重要な存在であり、ことある度に声を上げることもある相手であったが、一般の韓国市民からすればいくつか関心のある外国のうちの一つぐらいの存在になったといえるだろう。

一方で、日本人の韓国への関心は高まっていった。現在では、経済的にどちらが優位か、社会経済の成熟度はどちらが進んでいるかといった点よりも、韓流ブームを通じた文化的イメージや政治的な日韓関係に基づくイメージに多くの関心が寄せられている。実際、21世紀に入ると、在韓生活を扱った書籍は減少し[31]、2000年代後半ごろから「嫌韓」をテーマにした書籍が日本の書店を席巻するようになった。しかしこの数年でいわゆる「嫌韓本[32]」は減少し、韓国芸能や文化への注目に再び変わりつつある。これは日本国内で求められる韓国情報の質が変化した証左ともいえる。一方で、個々の韓国生活に関する情報はインターネットで発信されるようになり[33]、在韓日本出身者によるダイレクトな韓国生活の情報が手に入るようになった。このように韓国生活や韓国へのイメージを想起する情報が大幅に増加した一方、それらの情報によって韓国に対する憧れや新たな偏見を生み出すといったことも生じている。しかし、ここに至る過程にも、戦前からの日本人の朝鮮半島に対する意識がどこかで連なっており、冒頭で引用した金村の違和感に特に外国にルーツを持たない日本人が無意識的に今を生きている可能性があることは仮説として提示したい。筆者はソウルを中心に、韓流ブーム以降に来韓した在韓日本出身者40人以上に対する移住動機や移住後の生活に関するライフストーリーの聞き取り調査を実施している。今後それらの結果と総合して、日韓国交正常化後から民主化、そして韓流ブームという時代の変化における在韓日本人の生活や価値観の変化を検討していきたい。

参考文献（表に掲載した分を除く）

【日本語文献】
エドワード・サイード（1993）『オリエンタリズム』上下巻、板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳、平凡社
金村詩恩（2019）「韓国好きの若者が放った「純ジャパ」という言葉に抱いた違和感」https://gendai.media/articles/-/68887?imp＝0（最終閲覧日 2023.1.25）現代ビジネス

[31] 管見の限り、たがみ（2004）、山崎（2008）があるに過ぎない。
[32] 例えば、山野（2005）、桜井（2006）など。
[33] 報告者のインタビューでも、カカオトークの「在韓日本人の子育てグループ」のグループトークの存在や、日本語の韓国情報サイト「KONEST」の掲示板などで必要な情報を入手したという語りを得られた。

川端浩平（2020）『排外主義と在日コリアン―互いを「バカ」と呼び合うまえに―』晃洋書房
木村幹（2022）『誤解しないための日韓講義』PHP 新書
クォン・ヨンソク（2010）『「韓流」と「日流」―文化から読み解く日韓新時代』NHK ブックス
黒田勝弘（1983）『韓国社会をみつめて 似て非なるもの』亜紀書房
姜尚中（1996）『オリエンタリズムの彼方へ―近代文化批判』岩波書店
桜井誠（2006）『嫌韓流実践ハンドブック―反日妄言撃退マニュアル―』晋遊舎
たがみようこ（2004）『ソウルで新婚生活。―新妻ヨーコちゃんの韓国暮らし―』大和書房
デランド・ウィン・スー（2020）『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション―人種、ジェンダー、性的指向：マイノリティに向けられる無意識の差別』マイクロアグレッション研究会訳、明石書店
戸田郁子（2012）『悩ましくて愛しいソウル大家族』講談社
松樹亮子（2020）「在韓日本人の韓国文化受容意識と行動選択に関する一考察―インタビュー調査から―」『日本文化學報』第85輯、pp.193–219
山崎千秋（2008）『女子大生ちあきのアジャアジャ！頑張れ韓国交換留学』振学出版
山野車輪（2005）『マンガ嫌韓流』晋遊舎
四方田犬彦（1987）『われらが「他者」なる韓国』PARCO 出版局

【韓国語文献】
법무부（各年度）『출입국・외국인정책통계연보』법무부
아사다 에미（2009）『재한일본인 주재원 커뮤니티연구：‘리틀도쿄’에 거주하는 부인들의 사례를 중심으로』2008년도 한국학증앙연구원 한국학대학원 석사논문
유끼（구라시게 정 우회）（2001）『한국에 유학하는 자이니치（在日）학생의 삶과 문화』서울대학교 대학원 교육학과 교육학전공 2001년도 석사논문
윤다인（2014）『모국수학이 재일동포의 민족정체성에 미치는 영향에 관한연구』서울대학교 대학원 사회학과 2013년도 석사논문
임영언・이화정（2013）「한국거주 일본인의 문화적응 모형과 다문화적 수용태도 연구」『평화학연구』제14권 4 호、pp.187–206